

# 対話型鑑賞の

# これまでと

# これから

VTC/VTS 日本上陸30周年記念フォーラム2022

2022

8.20(土) - 21(日)

会場 >>> 東京国立博物館 平成館大講堂

日時 >>> 20日 10:30-17:30 / 21日 9:00-17:30

定員 >>> 150名(先着順) および 同時配信

参加費 >>> 会場 8,000円(2日間通し) / 配信視聴 1,800円(各日)

※緊急事態宣言等が発令された場合、会場及び行政の指示に従い対面開催を制限することがあります

## 企画趣旨

ニューヨーク近代美術館 (MoMA) は1980年代後半、Visual Thinking Curriculum (VTC) と呼ばれる鑑賞プログラムを開発しました。従来の、MoMAのスタッフから来館者に向けた一方通行の作品解説ではなく、VTCはスタッフと来館者、時に来館者同士の対話を介して作品を鑑賞していこうという試みです。

1993年から3年間、逢坂恵理子と福のり子は日本の美術関係者を対象に、MoMAでVTC研修を実施。その後、VTCはVisual Thinking Strategies (VTS) と名前を変更し、日本では「対話型鑑賞」と呼ばれて美術館や学校教育現場に徐々に広まってきました。近年、同鑑賞法はサイエンスや医療・ケアの分野でも評価され、さらにビジネス界でも大きく期待されるといった、30年前には考えられなかった広がりを見せています。

しかし冷静に現状を分析すれば、様々な問題点や課題が散見されるのも事実です。例えば、対話型鑑賞への理解の多くが、「自由」に「みたいようにみればよい」に留まっていること、ファシリテーターの育成が追いついていないことなどです。このような課題にいま真剣に取り組まなければ、対話型鑑賞はブームで終わってしまうのではないかと、という危機感を抱いています。

対話型鑑賞日本上陸30周年を迎えるにあたり、一度立ち止まって、その歴史を振り返り、現状を把握し、問題や課題を浮き彫りにしていきたいと思えます。そして未来に向けて、私たちは何をしていくべきなのかを、各分野で対話型鑑賞と関わって来られた方々と語り、考えていくためのフォーラム「対話型鑑賞のこれまでとこれから」を開催いたします。多くの方々のご来場を、心からお待ちしております。

## 登壇者・モデレーター ※敬称略・順不同



国立新美術館長

水戸芸術館現代美術センター主任学芸員ののち芸術監督、横浜美術館館長を経て、2019年10月より国立新美術館長。1992年、現代美術の国際展「ドクメンタ」で、偶然、福のり子さんと出会い、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) の教育部門が開発した鑑賞プログラム、VTCについて知る。その後、福さんと協働してVTCを日本の美術界に紹介する研修をMoMAで3回実現。1995年には、水戸芸術館現代美術センターで5日間の研修を実施。作品理解を深めるだけでなく、それを介して他者への理解を促し、自分自身や世界を複眼的な視点でとらえる気づきを与えてくれたVTCとの出会いは、美術館活動の枠組みを広げるきっかけとなった。

逢坂 恵理子  
(撮影：石内部)

対談

## 対話型鑑賞の黎明期



福のり子

京都芸術大学 教授 / アート・コミュニケーション研究センター長

ニューヨーク近代美術館 (MoMA) で1年間インターンをしていたときに、フィリップ・ヤノウィン、アメリア・アレナス、そしてVTCと出会う。1993年から3年間、逢坂恵理子氏と共に日本の美術関係者を対象に、MoMAでのVTC研修を企画。2004年に京都造形芸術大学 (現：京都芸術大学) 教授に着任し、1年生の年間必修カリキュラムとして対話型鑑賞を取り入れる。2009年、「アート・コミュニケーション研究センター」を設立し、対話型鑑賞の普及・研究に携わる。訳書に『なぜ、これがアートなの？』(アメリア・アレナス著、淡交社)、共訳書に『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』(フィリップ・ヤノウィン著、淡交社) 他。

## レクチャー 対話型鑑賞の功罪：美的知覚の観点から



森 功次

大妻女子大学国際センター 専任講師

専門は美学・芸術哲学。主な論文に「美的なものとはなぜ美的に良いのか：美的価値をめぐる快楽主義とその敵」(『現代思想』2021年1月号)。訳書にロバート・ステッカー『分析美学入門』(勁草書房、2013年)、ノエル・キャロル『批評について：芸術批評の哲学』(勁草書房、2017年) など。対話型鑑賞に関しては、「『ビジネスパーソンのためのアート』本の流行と、教育的に注意すべきこと」(『人間生活文化研究』31、2021)、「美術作品の教材化の功罪：『ビジネス×アート』における対話型鑑賞が取りこぼすもの」(『美術手帖』2021年9月号)などを執筆。このフォーラムで得た知見をつかって、より良い授業ができるようになることを期待しています。

## レクチャー 対話型鑑賞ファシリテーターの育成と課題



伊達 隆洋

京都芸術大学アートプロデュース学科 准教授・学科長  
アート・コミュニケーション研究センター 研究員

専門は人間科学・臨床心理学。2007年から2年間、京都芸術大学の福のり子教授が開展する対話型鑑賞プログラム「ACOP」の分析に携わったのをきっかけに、2009年より現職にて対話型鑑賞の実践と研究に従事。大学生のファシリテーション・トレーニングのほか、全国的美術・博物館、教育関係者への普及・研修などをおこなっている。また、対話型鑑賞を応用した医療従事者の養成や、2012年以降、企業の人材育成や組織改善なども多数手がけており、近年は社会的広がりに伴って生じている対話型鑑賞への誤解や実施者の理解・技術不足の改善を目的に、対話型鑑賞のエキスパートを育成するファシリテーションセミナーも主催している。

## パネルディスカッション 美術館と対話型鑑賞



部筑 正敏  
(モデレーター)

豊田市民芸館 館長 (元豊田市美術館学芸員)

1969年愛知県生まれ。1998年アメリア・アレナスとともに「なぜ、これがアートなの？」展を開催(川村記念美術館、水戸芸術館との共同企画)。以後数々の展覧会企画に携わりとともに豊田市美術館の教育部門を担当。特にガイドボランティアとの協働による対話型鑑賞の実践と普及に取り組む。2021年より現職。共著『まなごしの共有』(淡交社、2001年)ほか。人類を脅かす感染症のパンデミック、ロシア・ウクライナ情勢など、近年、世界ではシロクロがつかない複雑な問題が多発しています。こうした時代だからこそ、社会や日常との向き合い方に有用な気づきを与えてくれる「美術」の存在とそれを読み解く対話によるアプローチはますます重要性が増しているように感じています。



黒澤 伸

公益財団法人 金沢芸術創造財団 事業課 芸術・交流アドバイザー  
金沢市民芸村総合ディレクター (元金沢21世紀美術館副館長)

VTC日本上陸以前であった1991年、水戸芸術館現代美術センターにて「美術教育ボランティア」を組織し活動をスタート。来館者とともに作品や展示の話をしつづけるためには、日頃からアートに関する様々なコミュニケーションの機会を持つことにより、メンバーの学習や成長につながるとの認識から、中心となる活動を「ギャラリートーク」と位置付ける。2004年、金沢21世紀美術館の開館に際しては市内の全ての小・中学生約40,000名を招待する「ミュージアムクルーズ」プロジェクトを実施。VTCを意識したアートコミュニケーションプログラムとしてスタートさせ、以降、小学校4年生を対象に現在まで継続している。



稲庭 彩和子

独立行政法人国立美術館 主任研究員

ロンドン大学 University College London (修士)。2011年より東京都美術館のリニューアルにあたりアート・コミュニケーション事業を担当。市民と協働するソーシャル・デザイン・プロジェクト「とびらプロジェクト」や上野公園の9つの文化施設が連携するラーニング・デザイン・プロジェクト「MuseumStart あいうえの」、超高齢社会に対応する「Creative Ageing ずっとび」などで「対話」を重視したコミュニケーション・デザインに関わる。主著として『美術館と大学と市民が作るソーシャルデザインプロジェクト』(青幻舎、2018)、『こどもと大人のためのミュージアム思考』(左右社、2022)等。



原 泉

山口情報芸術センター[YCAM] エデュケーター

京都造形芸術大学 (現：京都芸術大学) 芸術表現・アートプロデュース学科に在籍中、対話型鑑賞と出会い、「アートとは鑑賞者と作品の間に生まれる不思議で深淵なコミュニケーション」だと学ぶ。人が作品をみる時の脳と視覚の関係について卒業論文を書いた後、九州大学大学院ユーザー感性学専攻 (修士)、そして大阪大学大学院生命機能専攻 (博士) で同様のテーマを研究。現在の勤務先YCAMで発表されている作品はほぼ全てが新作。まだ批評されていないこれらの作品から、一人でも多くの人々に「アート」を生成していただくために、これまでに学んだことを活かしていきたいと模索中です。

## 学校教育と対話型鑑賞



沼田 芳行

埼玉県所沢市立向陽中学校 校長

中学校において金曜日朝の先生と生徒が芸術作品を媒介にして話す「朝鑑賞」の時間を実践して6年目が経ちました。美術科ではない専門外の先生も、対話型鑑賞のファシリテーターを実践しています。子どもたちは朝鑑賞を通して、「観察力」「推論する力」「他者を受容し理解する力」「自ら学ぶ力」「コミュニケーション能力」等を磨き、批判的思考力への誘いも感じています。目に見えないかけがえのないものを手に入れた私たちの変容を、今回のフォーラムでお話できればと思っています。著書『校長の挑戦』（教育開発研究所）。



米永 幸歩

『13歳からのアート思考』（ダイヤモンド社）著者  
東京学芸大学 個人研究員 / 浦和大学学校教育学科 講師  
九州大学芸術工学府 講師

「絵が苦手だから美術が好きでない」「作品を前にしても感想が出てこない」という声をよく聞きます。その背景には、「絵を上手に描く」「美術の知識を丸暗記する」といった従来型の美術があるのではないかと感じていました。そこで、アートを通して、視点を横断して対象を捉え、そこから「自分だけの答え」をつくることに力点を置いた探究型の授業を行ってきました。全国の学校での出張授業・企業研修などの場で、この考えに基づくアートの授業を年間100回以上行い、アートの面白さを伝えています。

## 科学・医療と対話型鑑賞

モデレーター：北野 諒（大阪成蹊短期大学 幼児教育学科 講師）



大野 照文

高田短期大学 図書館長（元京都大学総合博物館館長）

専門は古生物学。1997年、京都大学に発足した総合博物館に教授として赴任、来館者向けの理科ワークショップを様々行った。あるとき、福のり子さんに出会い、対話しながら課題を解決してゆくワークショップの理念に共鳴、以来交流し、刺激を受けている。ワークショップでは、参加者の旺盛な好奇心や豊かな発想力に感動すると共に、思い込みや見落とし、対話下手も繰り返し目撃した。今回のフォーラムでは、これらの体験を人の知恵の進化の文脈で解釈してみたい。  
関連論文：大野照文（2020）第10章 人類の知恵の進化と新学習指導要領一博物館からの視点。山極壽一・村瀬雅俊・西平直（編）『未来創成大学の展望 逆説・非連続・普遍性に挑む』225-249、ナカニシヤ出版。

## ビジネスパーソンと対話型鑑賞



加藤 種男  
（撮影：吉原悠博）

クリエイティブ・ディレクター：  
企業による文化振興に取り組むとともに、文化政策提言、アーツカウンシルの推進、創造都市の推進、アートプロジェクトの促進とそのネットワーク化に取り組んできた。ミモカ美術財団理事、SOMPO美術振興財団評議員、アートNPOリンク理事なども務める。

企業にアメリカ・アレナス氏を招聘して、対話型鑑賞に取り組むなど、早くからこの活動に共感してきた。その一部は、アメリカ・アレナス「みる・かんがえる・はなす：鑑賞教育へのヒント」のあとがきに紹介している。その上で、近年のビジネスマン向けの対話型鑑賞事業に参加して、その深化、転換に相当の工夫が必要であると感じている。総じて創造性の機能を一層発揮する制度設計が必要であろう。本フォーラムには、この点からの議論喚起も期待している。



白井 隆志

株式会社MIMIGURI ファシリテーター・アートエデュケーター

学生時代より児童館にアーティストを招聘する「アーティスト・イン・児童館」の企画運営。その後、幼児教室のファシリテーター育成事業に携わる。このとき、絵画を見て対話型鑑賞の感覚を掴んでから、赤ちゃんと遊ぶ他愛もない様子を観察して対話する「赤ちゃんの対話型鑑賞」を実践。この経験が、対話型鑑賞の可能性をアートの外側へと探究する最初のきっかけとなった。『意外と知らない赤ちゃんのきもち』（スマート新書）を出版。現在は、企業を中心に、福祉施設や美術館、劇場など多様な場で、0歳から大人までを対象にしたアート・エデュケーションを専門とする仕事をしている。企業を対象としたものでは、経営理念の対話型鑑賞なども行う。



似内 達吉

大阪市立東淀中学校 教諭

私は大学時代、当時福先生が学科学長を務めておられた京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）芸術表現・アートプロデュース学科で対話型鑑賞と出会いました。私たちは対話型鑑賞を、ACOP（エイコップ：Art Communication Project）と呼んでいました。大学卒業後は中学校の美術教師として、表現活動の出発点となる「みる」ことに重きを置いた授業を行っています。今回のフォーラムでは、学生時代にACOPを介して学んだスキルが、現場の授業や生徒とのコミュニケーションにいかにかかされているかをお話したいと思っています。また対話型鑑賞がもたらす「問題解決能力」が、生徒だけではなく教師自身にも定着するためには何か必要なかを、皆さんと一緒に考えていければと思っています。



北野 諒  
（モデレーター）

大阪成蹊短期大学 幼児教育学科 講師

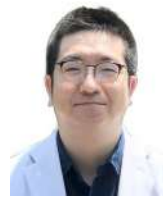
京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センターにて研究員を前任し、学校・美術館・博物館など様々なフィールドにて、対話型鑑賞を応用したワークショップの開発・実践を行う。現在は研究テーマを「関係の造形」として、幼児の表現活動や遊びを手懸りにしながら、非言語的な交感を含めた対話のかたちを探索している。対話型鑑賞に関連するテキストとして、共訳書に『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』、主な論文に「半開きの対話：対話型鑑賞における美学的背景についての一考察」がある。



三成 寿作

京都大学 iPS細胞研究所 特定准教授

1982年福岡県生まれ。北九州市立大学大学院国際環境工学研究科修了。博士（工学）。京都大学人文科学研究所、大阪大学大学院医学系研究科、日本医療研究開発機構（AMED）バイオバンク事業部等を経て、現職。2014年には、オックスフォード大学（HeLEX: Centre for Health, Law and Emerging Technologies）への海外派遣を経験。科学技術と社会、政策との関わりに興味があり、先端生命科学や先端医学を取り巻く倫理的・法的・社会的課題について取り組んでいる。近年、京都芸術大学（ACOP: Art Communication Project）との共同研究を通じて、科学技術やその社会実装のあり方を議論する手法を探索している。「対話型鑑賞」における「対話」や「鑑賞」の奥深さについて考えていきたい。



森永 康平

ミルクキ代表 / 獨協医科大学 非常勤助教  
MED AGREE CLINIC うつのみや 院長

先の読めない社会は単一化された方法論やHow toだけでは、到底大刀打ちできなくなっており、その傾向は医療においても例外ではありません。「自分で観て、話して得た情報を吟味し、診療の方向性を決定していく」、言葉にするのは容易ですが、これらの主体的な情報収集・思考力・判断力の具体的な育成法には課題が多いのではないのでしょうか。今回は4年前から開始した対話型鑑賞を主軸とした医学科の授業の目的やコンテンツ、受講後の学生の変化を紹介させていただきます。白衣の中にアートの心をもつために、フォーラム内で様々な視点に触れ、今後更に前進する足掛かりを得たいと考えています。



藤原 綾乃

公益財団法人 福武財団 アート部門

早稲田大学理工学部建築学科学卒。2010年公益財団法人 福武財団に入職、ベネッセアートサイト直島で展開する美術施設の鑑賞プログラムに対話型鑑賞を導入。2018年よりエデュケーションを担当し、幼児からシニア層までを対象にした学びのコンテンツ開発や、ファシリテーター育成に従事。主に学校向け教育プログラムや組織内外の企業向け研修にて対話型鑑賞を活用し、美術作品の鑑賞を通じて自己や他者に気づく内省体験や社会課題について思考するプログラムを目指し実践中。



平野 智紀  
（モデレーター）

内田洋行教育総合研究所 主任研究員

企業に勤務する傍ら、各地の美術館やアートプロジェクトで、対話型鑑賞ワークショップの実践やそれを通じた人材育成を担当。主な取組として、大地の芸術祭、あいちトリエンナーレ2019、六本木アートナイトなど。2009年に京都造形芸術大学の鑑賞プログラム「ACOP」と出会い、対話型鑑賞の学習と評価について数回の参与観察研究を行う。現在は東京大学大学院にて、その成果を博士論文にまとめている。京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター共同研究者。

1日目

8.20 SAT

9:30	受付
10:30	開会のあいさつ
10:40	対談 <b>対話型鑑賞の黎明期</b> アメリカ→ドイツ→日本 登壇者：逢坂 恵理子・福 のり子
12:00	休憩
13:00	パネルディスカッション <b>美術館と対話型鑑賞</b> 登壇者：黒澤 伸・稲庭 彩和子・原 泉 モデレーター：都筑 正敏
14:45	休憩 / 来場者交流時間
15:15	パネルディスカッション <b>学校教育と対話型鑑賞</b> 登壇者：沼田 芳行・末永 幸歩・似内 達吉 モデレーター：北野 諒
17:00	質疑応答・閉会のあいさつ 【17:20 終了予定】

2日目

8.21 SUN

8:30	受付
9:00	開会のあいさつ
9:10	パネルディスカッション <b>科学/医学と対話型鑑賞</b> 登壇者：大野 照文・三成 寿作・森永 康平 モデレーター：北野 諒
10:40	休憩
10:50	パネルディスカッション <b>ビジネスパーソンと対話型鑑賞</b> 登壇者：加藤 種男・藤原 綾乃・臼井 隆志 モデレーター：平野 智紀
12:20	休憩
13:20	レクチャー <b>対話型鑑賞の功罪：美的知覚の観点から</b> 森 功次
14:50	休憩
15:00	レクチャー <b>対話型鑑賞ファシリテーターの育成と課題</b> 伊達 隆洋
16:30	休憩
16:40	パネルディスカッション <b>対話型鑑賞の今後</b> 登壇者：森 功次・伊達 隆洋・北野 諒 モデレーター：平野 智紀
17:20	閉会のあいさつ 【17:30 終了予定】

※配信視聴では、一部ご参加いただけないプログラムがございます。

※タイムスケジュール・プログラムは変更の可能性がございます。最新情報は随時Webサイトにてお知らせします。

詳細、お申し込み先はこちらから

<https://vtcvtsforum2022.peatix.com>

※お申し込みはオンライン受付サービスPeatixのみ受付いたします



会場アクセス ※会場へは「西門」からのみ入退場可能です

- JR「上野駅」公園口、「鶯谷駅」南口下車：徒歩10分
- 東京メトロ 銀座線・日比谷線「上野駅」、千代田線「根津駅」下車：徒歩15分
- 京成電鉄「京成上野駅」下車：徒歩15分
- 台東区循環バス東西めぐりん  
「上野公園経由・三崎坂往復ルート」乗車、「東京国立博物館前」下車

お問い合わせ

VTC/VTS日本上陸30周年記念フォーラム2022事務局  
〒606-8271京都市左京区北白川瓜生山 2-116 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター内

TEL.075-791-9132 [www.acop.jp/news/vtcvtsforum2022](http://www.acop.jp/news/vtcvtsforum2022)

(木・金曜日 13:00~17:00)

